



九

中

月

夜

話

3039
6



叙

丁亥初冬苟且自游此地以降
書肆等競需小說之著述於余
陸續而不絕故客窗日無不對
几上夜無不親筆硯春去秋來
而時光如箭速經三年矣凡
作野史小說者皆是錦心繡口

飯島三省



才人墨客不能非傳涉獵和漢
史典諸子百家然如余固淺才
無半點之學家負無一卷之書
尚編書一部僅以念日爲限加
之書肆日促急而更編者不
顧苦心嗚呼奈何撰佳趣飾文
華有暇哉如本編填詞亦然焉
實是可謂一時燈下戲墨而百
年遺笑冊子也一長太息于時
半月夜話後編刻成此數行題
卷端爲之序云爾文政己丑仲
春

在浪華間鶯軒主人識

三日月の
長刀を
おろし
まくら
小の
岳亭

梅
樹
九

小野の
岩公

小埜家の長臣
山清記



小野の
同風尼



川風小吹まき
まゆろ
黒髪社ささる
岸の青柳
岳亭

者げんやむちやうどん
修驗者無腸道人

文太夫が

野夫
見
脈



陸奥の
郷士
鹽焼
文太夫

娘
小に磯





蟬丸傳記 半月夜話後編總目錄

第拾一面	磐提山の老精	第拾六面	狡猾の推壻入
第拾二面	勝見寺の施米	第拾七面	健男の鋭銃光
第拾三面	法延の想夫憐	第拾八面	雪降の小佛越
第拾四	庸醫の不問診	第拾九面	逢阪峠の新關
第拾五面	鍾愛女の逆髮	第貳拾面	胡如車の妻迎

種相成

蟬丸傳記 半月夜話後編卷之壹

第拾一面 盤提山老精

江戸 白頭子柳魚 編次

天の風雨の變あれ。地は水火の奇あり。森羅萬象一として怪くらさるゝといへども。庸人の帝目をのぞき尋て耳に早むかやへ。遇怪を祝ふと云ふ。恐るれど目馴るふ及べむ。嘗てこれに怪はば。物も蟬丸の奥陽岩提山の奥る。廢寺の所で。大勢の人声。さう。知はて木立の繁ふ身を潜めて。緯の爲体を窺ふ。本堂の繞ふ崩残る。椽の上は異類。變化の變化。酒酌う。遊び戯る。形相する。情ふれ。

人の心ある手足あるとけうがさく益み盛る。各其返り。
圍繞して舌うち一つ食ふさぬいと恐く身の毛も
うろたふ。此変化おが魁首とおおしこの眼の光り俊く白
の針をうえぬるが如き毛熟身生いで長刀のどた
ささぬふくく。彼変化蟬丸が秘蔵の玄上の琵琶如
の上に乗て尖る爪をめて四弦をうさるせと争り音
律をあらぬ者の弾むるも音を発さず。只弦の音する
のさるるふ変化のさも不與氣ふ。昨夜山の神の飛倉を旅
客の弾ぜりとさへ面白き音をあらむ。これば這奴が熟睡
せし間を窺ひ私に奪ひうて来つれど吾探りて更ふ

音をいごさるこそ心憎けれ。琵琶を傍へいかなる衆の
化とも彼魁首に對ひる風雅なる業の奥薄くこの頃人間
のうえぬ相撲といふ事行なれて既文徳帝の皇子惟
喬惟仁の御両方の御位を定めぬさへ角力の勝負さるせ
ぬとやういふこの所にて吾も角力をするて其勝負を以て
甲乙を定めぬといふなり。食く口を搦へくこの面白くんと
答へるふ。や一個の変化庭上におどろいで力足とくくと踏
らる。倡吾といふ人の来るべしといふ諸妖精どもより
と踊出引組捻合推合あるひの勝。或は負け散動笑ふさぬ。
最奥におも蟬丸も吾を忘る治也。いと讃る声み一人の

妖精これ知えつけ。最前より何やらん人の香のするぞと思ひ
ふ。彼首ふ人間の隠れ居り。いでよりて着ふせん。どのふ
丸の小蔭より。いであの妖精の對ひ吾の諸国武道修
行ふあるく者る。今宵路の踏迷ひ。不覚ふ此山中ふけ
いれり。奈何も汝お食物もあらん。吾も粗相撲を好
り。此世の思ひで。汝們と相撲をとつて。吾負る。速ふ汝
お喰るべし。といふは変化の是を。てこの一人奥ある業
なれと。土俵に擬へ堂の礎のうちみいる。蟬丸も心づ
衣服を脱捨同じく。礎の裡みさる。一人の妖精生
した人の首を携へいで。團扇より行司り。て二個なるふ

さへ。頻てヤツといふ声と。俱ふ生首を引と。齊しく。兩人
組付捻合押合ふ。蟬丸の何の苦も。彼妖精を取。投
ぬ。この口惜し。とつて出る。妖精も残らぬ。て。投
投。程ふ。彼魁首とお。した老精。口惜し。と。や。ひん。動
ふ。出て。此上の吾と。組ん。や。蟬丸。あ。是。後。来。吾
望む。所。然。い。你。は。群。の。関。と。み。あ。み。吾。負。ま。の。必。定
る。れ。と。萬。一。吾。勝。ま。あ。ら。何。を。賜。め。さ。や。といふ。は。変。化
の。点。段。で。傍。を。え。へ。り。彼。玄。上。を。指。して。吾。尙。你。負。な。り
此。琵琶。を。ま。じ。ら。を。べ。し。といふ。蟬丸。大。さ。喜。び。去。来。と。ま。ま
對。ふ。彼。老。精。も。衣服。を。脱。捨。赤。裸。と。な。り。て。動。さ。出。頓。く

礎の内ふいふが。行司の妖精の例の生首をなみふいれ。暫く
兩人が呼吸をうぐひヤットり。声と共に彼老精と蟬丸の
無手と曳組。霎時が間。更ふ龍虎の勢ひをまいて挑。か蟬
丸。精神力や勝らん。彼老精を引纏。取て眼より高くさう。あ
け。大地へ撞と投出。くられ。有繫の变化も大力無双。あ
られ。少刻が程の起。あぐら。蟬丸の這形勢を視て。いど
約束る。れば其琵琶を賜。これ。いふ。变化も是非。ある
琵琶を。拿て蟬丸ふ。ふへ。蟬丸の為課。くと玄上を受取
て。傍る。木の枝。ふけぬ。當下。彼老精。さ。口惜気。み。君の。空
ふ。古今。獨歩の怪力。あり。願。今。一番。う。なり。ん。や。い。ふ。蟬

丸。お。領。さ。望。あ。ふ。と。う。ら。か。幾。番。あ。う。と。も。相。人。ふ。る。う。べ。然。り
あれ。此。度。吾。勝。と。う。ら。い。你。が。命。を。取。ら。ん。が。そ。れ。諾。ひ。な。り。奈
何。も。今。一。度。勝。負。を。決。ま。べ。い。と。い。ふ。変。化。も。尤。と。美。諾。と。
頓。く。又。双。方。よ。う。礎。の。う。ち。ふ。い。り。引。組。霎。時。め。合。し。蟬。丸
金。剛。力。を。出。し。て。大。喝。一。声。を。う。と。え。へ。う。彼。老。精。を。礎。の。外。へ
搦。地。と。投。出。し。奈。何。変。化。も。約。諾。る。れ。ば。汝。が。命。の。這。勝。負。か。
花。ふ。貫。へ。り。え。悟。る。せ。よ。と。い。ひ。さ。ぬ。み。踊。り。菟。て。俯。卧。ふ。伏。す。
脊。を。力。み。但。せ。曳。や。云。と。蹂。躪。ま。し。退。め。老。精。苦。と。叫。び。眼。い。よ
う。血。を。吐。く。お。涙。ま。さ。う。て。死。う。け。り。這。為。体。み。残。る。変。化。も。慌
忙。逃。ん。と。さ。る。蟬。丸。の。刀。を。閃。し。て。此。首。彼。首。み。追。い。れ。一。人。も。残。ら。ぬ

斬る一息吻とつきて頓て消残りたる篝火を起し熱視る
 此魁首と云ふ幾歳経く麕猪の变化とおぼしるを火を照
 らして遠近に横つらる眷族們が尸を點檢する皆是異類
 異形の獸の变化あるを蟬丸意のうらみ思へらく此羊ふ
 似く九ツの尾四の耳ありて脊中より目ある辨能なり
 ん又猿犬の如くありて面人より眼の肚の下よりある咆鳴と呼
 るものなり又人の面後の躬ある所謂山澤水石の怪と云く
 とりけりのみやあらんぞらん其他年来中華の書籍にも其
 名視へる山猱窮奇猶豫鑿幽山樛五通七郎るんとよ
 べる者あらん吾張華が博物志及ばるれば悉く其名を識

るふやうなるも嘗て聞蚯蚓蜘蛛蟻の類の細く許る出で
 多の年を経ると蛇の怪なるはと異邦にいへるも只寓言
 らると思ひし今此變化を以て視るとさな廣く天地の
 間何ぞ妖怪變化するらん然に搜神白猿も強ち小説
 とはいひがたれ吾今宵不憶中斯る變化を易く退治
 するも全く吾武勇にあらば玄上の琵琶の威徳するへこの
 古寺も此終りて捨措は又や山賊變化の拙家とるうそ
 國人の仇とるらん若変化が尸骸と共に鳥有とるさうと
 する板柱るんとなおひ聚れこれを尸骸の四に積重なり
 て火をうけし後山風烈くた高峯のこととるれん猛火

盛ふ燃あがり。彼首此首ふ崩を残り。堂塔看々忽
 燼とる。しる。蟬丸の最快氣ふ。眺も琵琶を抱く。麓乃
 方へ下り。彼山の神の禿倉の辺り。近づく。以前の老翁と
 迎へ。蟬丸を招く。い。宴ふ。君は是當世の英雄。幸ひ
 ふ。て吾年来の仇を報く。るこそ嬉し。なれ。と低頭。平身。て
 恩を謝さる。蟬丸の再び山の神。對ひ。你。苟且。も神と
 崇り。出沒自在。る身。を以て。奈何。る。れ。バ。獸風情。乃。妖
 怪。の。為。ふ。吾守る。べ。さ。山を奪り。れ。其住所。ふ。さ。へ。迷入。との
 餘り。といへ。拙。なれ。と嘲笑。ふ。視。る。山神。の。最面。な。げ。す。
 頭を搔。さ。實。ふ。や。神。の。人。の。敬。ふ。ふ。よ。つて。威。を。増。す。

侍昔より此山の主。うといへ。も。此処。の。山半。懷。み。て。木樵。柴
 人。より。外。通。の。人。の。稀。ふ。か。祠宇。荒涼。う。て。誰。詣。る。人。も
 る。さ。の。の。くら。自。と。吾神。威。が。衰。へ。て。竟。は。妖。怪。變。化。の
 為。は。已。が。住。べ。さ。山をさ。へ。奪。り。れ。う。と。面。を。赧。く。物。語。る
 は。蟬丸。ゆ。て。然。ら。ん。吾。你。が。為。ふ。這。禿。倉。を。改。め。造。り。て。ま
 ひ。らせ。ん。の。奈。何。と。い。ふ。山神。の。斜。る。ら。び。怡。び。君。倘。吾。祠。を
 修理。し。て。ま。う。ら。ん。吾。又。君。の。影。身。を。添。く。其。危。を。救。ふ。べ。し。
 且。又。君。が。厚。情。の。絆。を。託。し。ま。ひ。ら。せ。て。さ。た。一。議。を。あ。げ。し。
 の。左。の。方。の。叢。の。素。土。を。て。造。り。て。吾。乘。馬。を。居。置。し。
 る。か。吾。本。社。を。ら。斯。荒。を。て。る。吏。る。れ。バ。況。や。廢。る。ん。



度崩きて後再び建る人ゆるく。許多の年を経る
馬も漸々雨露霜雪の爲は彩色も元是もくどけ早
休も離々とする。草芥も埋る。擋吏は這土馬を
てのり、ふふあめて。天神地祇の招呼せぬ。吏あること
馬はすくなく直に馳泰りて。神令をあやまりことるるへ
口惜ひひる。今迄は彼土馬の埋るる故を以て諸神の召
り。吏あれども行吏るる病とのと披露し。歩
役を勤るものくら。自権勢ゆるく果して妖怪の
爲は悩まれく。いくその患苦を経く。無念の月日
を送る。吏とて久し。君何卒此一吏をも承引て

めりるべきや。とりふは蟬丸ゆより是甚以て。易い奈
何もの社を修造し。土馬を制してあやめへ。と吏
ゆるげは領諾する。老翁はいより。怡ひ。面
顔もく。蟬丸は對ひ吾侪が嬉しさをお給
れ。大切の絆を告まひらるるを忘れず。君遠く
むして。婦女の吏は依る。危る。吏は遇する。是
天數みて。遁れく。猶委く。告まひらせ。死
吏あれど。天機を漏らば。の恐る。あり。自慎して。死
努急り。の吏あるへくら。最真成に。説示
蟬丸。忘れく。吾嘗て。色を好ま。これ。婦

今浪華の
燕窩堂
上馬の頭
何の用
是持門の
頃物の物
又其類歟

弱る事と云ふといへども尚心をつけて汝が
あるべしといふは山神の其辭のいさめなり
ありちる。東西よりひまは東雲近くるり
山神の厚く恩を謝し暇を告て奥の方へ去るよ
と現へしが忽姿の見へざるなり斯て夜中明放れ
たれを蟬丸なり社壇を立出て老翁が辭の如
く雄手の草むらなをくさして視るふそれりと
むる思ふ礎の跡残り扱こそと其思ふの土を
掘うくちてみるふ案は遠く土にて作り馬
の形くさるゆの首出たり。それるん彼土馬るん

と思ふにつけ再び考ふるふ吾素世を忍み
うあれ。白地は其匠は分付て社を営み土馬を
造らんと牌あり。可然思案もがると須臾改を傾
けていさし一計を生じ懐帝をとりいさ
幣束を切られを木の枝とて又貯へ持し軍用
金のうち百兩をとりちて橐にいれ此木の枝は
結びねて是を携へくさるくと三大有余の神木と
も覺した杉の樹は隣り程よき枝は縁着又木を
傳へく下るなり。刀を抜て其木を推制りやが
腰間より墨斗を拿出し。此柄は黄金百兩あり

神皇正統記後編卷之二

金を以て禿倉を修理し又土の神馬を造り
禿倉の前は措べし。然らんよの来年うまらば
作るべし。倘疑ひて是金を掠る輩あらば勿心
神罪を蒙り一村の人民一人も残らば速に命断
亡ふべしとの也と書し終り斯る置り里人恐れ
て此金にて祠を営み土馬を造らん疑ふ處
らばと獨心中は打うつづき。輕て又簷を深くし。琵琶
を脊負ひ岩手山をを下りたり。果して其日
山稼の者爰をるるとて。以書記を視。殆ど
幣をうつく大さは駭くといへども。其文字は
記

ある者一人もるうづれは。徑に村に馳入る。莊官
樵嵐勇太左工門と云者は告ぐるよ。勇太左工門
の頗る文学も有る漢兒あり。半の信。半の
疑ひるが。郷人と俱に。此所は来り遙の措をんあ
ぐりふ。奈何よ。郷人が云へる。遠きは三丈。余の
杉の木ど。あま白き幣束ひらぐと。風は靡き。木
の葉は置る露の玉さへ。旭は照る。かたて金色乃
光り。あるはさへ最怪し。くも尊とく。えゆるは昔も今も
奇を好むる人情。一大虚を吼へ。萬大實を
諺の如く。や老若男女許多お聚ひ来て

明の此梢は天降りよりはせしむらん。阿
がや号とやと伏拜するどるどる置しこり。太
左工門の二人を制し。近くともみく彼許は書
識せし数行の文字を讀下して大なる駭きと
つ入る告知らせ。叔杉木樵は命じて後梢より
のからるる果して百兩の黄金ありければ且恐れ
且号とに人等も少對ひ此社には山の神の禊
倉るるよりぬれど。早晚斯荒れをて泰詣する人
もふさ。御神の歎きぬひて。斯る奇瑞を願
ひひくものなるべし。今迄然る靈驗灼然るる神

ともあらは。年来疎ませし罪いと恐ろし。と流石鄙
人の直るる心より俄頃信を起して恐れ敬ふは
莊官既如此るれば郷人争う信せさらん皆共侶
も手をあ合して伏拜むるを致て莊官がえりひと
して近郷の木匠彫刻師と云々と撰と本社拜殿
神馬等へいりも更へ玉垣華表額堂の類はいふ
まで最花麗に成就るるれば是よりして泰詣の人
絶へる萬般の願ををるる一ツとて就むこと
るく其翌年も殊に豊作なりて人歡び勇む支
りるくその神徳を仰ぎ奉るとぬ

第二拾二回

勝見寺施米

承る程は其歳も著きて。明は昌泰三年前の鏡
 守府お軍小野の春風の後室同風尼ハ阿武隈
 川の庵室よりて夫と兄とが菩提を吊ふより外他
 更るゝ斯てややく春と過秋と著て霜月ともな
 りく来某日の去歳非命は死しける兄や嫂が一
 周忌日みあつるをどふ香火院安積山の邊
 る。安積山勝見寺はあるて。七日七歌の大法
 會を催ふ。満七日は乞丐非人の輩三千人ハ
 米一斗は青銅一緡を施さむやとて。まじり勝見

まで水をよめた砂を盛らせ又本堂玄關の
家の定紋附く幕あ廻く廣庭より米と錢を
の如く積め給ひ縛迷漏もるく調いしうの菰葉長老
の許多の僧侶を従ひ徐々と本堂へ遶出聲高
やうに読經しとあつたに形勢佛在世のむりく祇
樹給孤獨園におめて大比丘衆千二百五十人と俱
は御母摩耶夫人の持苦提を吊ひぬひくも斯や
と思ふをりりり。程多く同凡尼梅樹丸の恭詣之
と披露の声とゆりともは長老の後弟を倡ひ端をみ
出迎へる。同凡尼の白綾の衣ニツ三ツお重ね着て

上りの紫の衣を着る。水晶の念珠つまぐ
。の彌陀の称名を唱ゆるさま。最殊勝なも
尊々れ跡は後入諫山清記。今年七ツはるらせ
る。処の梅樹丸を抱こさひらせ。其他尼公う
仕ゆる侍女食一様の白小袖肌の雪を奪ひつべ
く見ゆ。長老遙に召をさげ。内令兄姉姉の冥福を
祈りぬさんとの此度の大法會。貧道もいれ許多の
僧侶。此程より日夜大般若轉読怠慢するく
もてや今日満七日。よづくるれへと招ぐるへ
去歳の今日を思ひ出くやくぬはん。左右め



さへるく不覺^{ふかく}は候^{さへ}さうぐさうぐの如^{ごと}て儲^もの席^{せき}を
なりぬへが。早^{はや}焼^{やう}香^{かう}の時^{とき}刻^くるう。いざと案内^{あんない}はあ
かひて弟^{あとう}一の焼^{やう}香^{かう}の幼^{よう}稚^ちなからも梅^{うめ}樹^{じゆ}丸^{まる}弟^{あとう}二^{ふた}と
則^{すなは}同^{どう}風^{ふう}尼^に。弟^{あとう}三^{さん}の執^{しやく}権^{けん}諫^{せん}山^{さん}清^{せい}記^きと夫^そより下^{しも}皆^{みな}一
々^{いづ}焼^{やう}香^{かう}あひあひとれば。異^い口^{こう}同^{どう}音^{おん}は念^{ねん}仏^{ぶつ}して素^{もと}姓^{せい}
延^ひるるなりとて。同^{どう}風^{ふう}尼^にの再^{ふた}び清^{せい}記^きは對^{たい}せぬ
ひ。豫^よて准^{じゆん}備^びくる米^{こめ}と錢^{せん}とを丐^う児^ご們^らにとりて
べし。妾^{めかけ}も和^わ子^こと俱^{とも}はけ所^{ところ}は有りて足^{たり}物^{もの}せん
梅^{うめ}樹^{じゆ}君^{きみ}をとるひて端^は近^ぢみ立^た出^でぬ。清^{せい}記^きは
委^い細^{さい}領^{りやう}兼^{けん}して。奴^{あな}僕^べをよねさ此^{こゝ}旨^{めい}を傳^{つた}へり。又

隸^べの門^{かど}前^{まへ}は走^{はし}り出^で早^{はや}施^し行^{ぎやう}の時^{とき}刻^くるれ。前^{ぜん}後^ごを競^せ
ひてとるさや物^{もの}徐^{あや}に。疾^{とく}門^{かど}内^{うち}へ入^いるべしと呼^よぶ声^{こゑ}
は最^{さい}刻^くより。俟^{まち}儲^もる丐^う児^ご們^らの驚^{おどろ}破^やりよう恰^さも
潮^{うしほ}の涌^うが如^{ごと}く門^{かど}内^{うち}はこゝに形^{かたち}勢^{せい}盲^{めが}目^めの杖^{つゑ}はこ
が膝^{ひざ}行^{ぎやう}の古^{ふる}なる木^き履^{ぞうり}を便^{べん}と。或^{ある}の孩^わ児^ご一^{ひと}個^こを脊^せ
中^{ちゆう}は肩^{かた}ひ。一^{ひと}個^こを懷^ふは抱^{いだ}さ。妾^{めかけ}も三^{さん}個^こを給^{たま}ふるど
言^いひ。借^か児^ごして来^きはると思^{おも}ひ。平^{へい}素^その盲^{めが}目^めなりと
思^{おも}ひ。法師^{ほうし}。今^{いま}日^ひの眼^めを皿^{ひら}の如^{ごと}く。我^{われ}先^{さき}はと
進^{すす}むるあり。又^{また}のなるもいふせさ病^{やまひ}はて惣^{そう}身^{しん}は
蟻^{あみ}のこゝろ腫^{はれ}あがりたるあり。干^ひ物^{もの}がどく瘦^{やせ}

へく骨と皮をうするもあつ。伏見の公卿めさう
 あれを片岡山の飢人は似るもあつ。伊勢参り
 物振廻国の修行者熊野詣の勸進比丘其外
 傀儡唱門師吾も吾もと推合壓合言動揺わ
 きて米と錢とを推戴さ。皆念仏をとるへは
 門前さして出さる。如斯きこと凡二時余よて
 三千人の施行全く竟りこれに歩卒の立出
 門を開る。今よで置りりも忽寂寥として
 折々宝鐸を通み松風の音のともる。長老の同風
 尼梅樹丸は對ひ少刻客殿にて休足しなへり。

軒て庵末るる齊をもよひらさる。それほあべせ
 と宣へば所化の心悟先は立いざけ古へと案内は從
 ひ。尼公をそいれ諫山も菰庵和尚は會釈して廻
 廊をうちわぐり客殿へこそ入りぬ。係るおら
 肩々と杖を突立つ門内へ進入る一人の盲目あり。
 其行粧を奈何といふ。改は綱頭巾を戴き。躬は
 縹色は黒持の紋つさる。木綿布子を着る。
 木曾の麻布の袴をき。脊は大ききなる襖包を
 負ふ。軒て件の盲人の通名もなく門を入て遊行と
 うら通る。歩卒の遠目と視より暮直は馳来り。

捧をりて遮止りて声をあつて己胷盲奴。あつて
 所と思ふや。忝も前鎮守府將軍小野春風公乃
 御香花院安積山勝見寺といふ梵刹あり。本日
 も同凡尼公の法令兄保則は并は蔓の前西君の一
 周忌は當らせ給ふよりて七昼夜の大法會を行
 るこそせむ。此処へ通名もるゝ。恣は通らんとするおや
 肝太々。疾返らば。吾儕が一捧を喰らひさんと敦
 圍荒く言れど。贅者の些中駭々ど。奈何も此所を
 その安積山勝見寺といふ夏に眼をいへ侍らねど
 香々。と。句ひて鼻よりててや知りつ。今日

林宮はいさ。施行のあるとやらん。こと知
 てつと。と来り。其のる。吾儕も其施行の錢
 と米と給ふ。と。歩卒。おめ。汝の果後
 拙さ。其施行の三千人を限りとする。夏
 今。お三千人の悉く。清く。う。その。や。叶ひ
 減く。立。といへ。彼贅者のなをも動
 法の會。小野の後室の令兄と。其内室の苦
 の。今。令兄といふ。出羽の国の領主。て
 其内室。則今の帝。敦仁君の母。御の妹。前
 中ら。然。あ。一。天の君の。外戚の人々の冥福

いのもうみ施行は三千人を限るといぬりよる人
を容る。何卒吾侪只一人よその米錢を施くといふ
これうゝぞ力後ひよの吾侪が日比嗜る瑠璃色の
曲をばくまひらせんといと誇負ふ云をばて歩卒
の大さな怒る。這奴か盲人るりと容赦さぬ萬般
るる浪言を吐く奴うる。其罪ゆるぐといへども
大事の法會の今日るれば廣大無辺の慈悲をわ
つて釋穩便にしてとほする。疾く返れと六尺棒
よて推戻さんととれど盲人の更うゆゆれぬ。係紹
介ことるらぬの吾侪直は尼公は願はるぬ。其ふ

かへと杖とめて六尺棒をもちのけて進みいらんとあ
らうとぬ。

蟬丸
傳記

半月夜話後編卷之壹 畢

飯の三食

